"Europe in Danger—Democracy in Danger!?"　参加報告書

北原　一志

・概要

日程：2023 年 8 月 13 日～19 日

場所：Europäische Akademie Otzenhausen, Europahausstraße 35, 66620 Nonnweiler, Saarland

後援：Universität Bielefeld

・所感

8 月 13 日から 19 日にかけて、東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター（DESK）の奨学金を活用してサマースクール "Europe in Danger–Democracy in Danger!? " に参加した。といっても、別に私はヨーロッパの民主主義に特別興味があるとか、EU の仕組みについて学びたいというわけではなかった。TLP のミュンヘン研修に行かない代わりに空いた夏休みの時間をどう使うか考えていた時に、ちょうど DESK からのメールでこのサマースクールの存在を知り、時間とお金の目途がついたから深く考えず申し込むことにしたのであった。英語での志望理由書や履歴書を求められたが、友人と頭をひねりながら自己アピールの文章を考えるのも楽しかった。

幸い書類は通り、無事サマースクールに参加できることになったが、何か新しい物事に踏み出す際につきものの不安に襲われることになった。自分はヨーロッパの民主主義に関して特段何も知らない。果たして自分はサマースクールの謳う "Interactive workshops and lively discussions " についていけるだろうか。そしてその前に、知らない外国人と二人部屋で一週間暮らしていけるだろうか。他の参加者たちとちゃんとコミュニケーションをとれるだろうか？など、悩みは尽きなかった。しかし、TLP の授業終わりに梶谷先生から「若いのだから冒険をしなさい、行けばなんとかなります」と背中を押していただき、まあ何とか気持ちも固まったのだった。

羽田から飛行機に乗り込み、フランクフルトに降り立った。TLP の春季研修でも使ったので初めて来たわけではなかったのだが、いざスーツケースを回収して近距離列車乗り場に向かい、切符を買う段になって、自分はいま異国にただ一人であるという事実に猛烈な心細さを感じた。よく考えたら、誰の引率やバックアップもなしに一人で海外を訪れたのは初め

てだったのだ。海外留学にしても何にしても、孤独に耐える強い精神力は必須のものだと思った。一人で来ないことにはわからない発見だった。

最寄り駅からアカデミーまでは、手配されたバスで行けることになっていた。駅を降りると、すでに他の参加者たちが多く到着していた。ロシア出身だという人がいたので話を聞いていると、僕はウクライナ戦争に反対してロシアでは犯罪者だから、ドイツに亡命しているのだと言っていた。祖国を追われる覚悟で政治運動に身を投じるには、いったいどんな覚悟がいるのだろうか。サマースクールごときで不安を抱いていた自分がなんともちっぽけな存在に感じられた。私はあと 10 日もすれば日本に帰るが、目の前のロシア人は祖国に帰れないのだ、と思うと複雑な気持ちになった。

駅からアカデミーまで運ばれた私たちは、まずオリエンテーションを受けた。近くの人とペアになって相手の自己紹介を聞きそれを発表する、といった定番のものから、この場にいる全員をきょうだいが多い順に予想して並べるという初めて見たものまであったが、何より衝撃的だったのは皆が積極的に意見を言い合い、進行役の教授に提案をすることも厭わない空気感だった。その教授も若い女性で、非常にフレンドリーな雰囲気で参加者に接していた。自己紹介の場で分かったことだが、他の参加者は多くが大学院生で平均年齢も高かったのだ。サマースクールと聞いて自分が予想していたものとはだいぶ違っていた。参加者の国籍も、ドイツやロシアを始めチェコ、ルーマニア、トルコ、エジプト、インド、韓国、中国と多彩だった。夕食の時間にいろいろな人と喋ったが、分かったことは相手の国についての知識の多さで会話が弾むかどうかが決まるということだった。例えば相手の出身の都市を知っているだけでも違うし、その国の言葉を少しでも話せれば親近感が深まるものなのである。国際交流において、いろいろな国についての広範な知識が非常に重要であることを実感した。夜、同室になったドイツ人から流星群があるらしいから見に行こうと誘われ、ついて行った結果真っ暗な山の中を 1 時間歩くことになった。聞いていた通りドイツ人は歩くのが好きなようだった。

月曜日に最初のワークショップが始まった。懸念していたほど専門知識が求められるようなものではなかったが、英語の講義を何時間も連続して聞くのは初めてでかなり体力を消耗した。英語は得意な方だと思っていたが、まだまだ海外の大学の講義レベルについていくのは難しく、さらなる勉強が必要だと感じた。午後のワークショップ後、教授に連れられ第二次大戦時にドイツ軍がフランスの侵攻を防ぐために築いたという対戦車バリケードを見学に行った。フランスが対ドイツ戦に備えて築いたマジノ線のことは知っていたが、ドイ

ツが対フランス用の防御壁を築いていたということは初めて知った。島国である日本と、陸路で国境を接する大陸ヨーロッパの国では防衛に関する意識が根本的に異なるようであった。

火曜日も同じようなセミナーが続いたが、正直、その内容よりも休み時間に他の参加者たちと交わした会話のほうが印象に残っている。イスタンブール育ちの Yavuz とはトルコの文化の話で盛り上がり、ミュンヘン生まれの Max には美味しいビールを教えてもらい、 ロシア人の Ivan にはロシアの名前の付け方について教わった。みな行動力があり、物怖じしない、魅力的な人で、会話しているだけで刺激的だった。

水曜日にはストラスブールの欧州議会と欧州評議会を見学した。ここでは実際に働く人が講演をしたうえで質問に答えてくれたのだが、他の参加者たちがみな自らの問題意識を持って質問をしており、自らの無学さに恥じ入ることとなった。しっかりした学問の土台があるかないかで、同じプログラムから得られるものの大きさも変わってくるということを実感し、後期課程では少なくとも「自分の専門は社会心理学である」と胸を張って言えるくらい真剣に学問に向き合わなければならないと心に決めた。

木曜日には「EU の意思決定を疑似体験する」というテーマで、役割毎にグループに分かれて議長などの役職を決めてディスカッションを行ったのだが、私はこんな白熱した議論は初めて経験した。「管理職における男女比のクォーター制を強制的に導入するべきか」というホットな話題でドイツ人の男女が喧々諤々、両者一歩も譲らない議論を繰り広げていた。双方から自分の意見を通すのだという強い意志を感じた。日本では見たことのない、周りの空気など窺っていては発言することすらままならないような勢いに少し圧倒されてしまった。議長も発言を取り仕切ったり全体の流れを管理したりといった仕事をスムーズにこなしていて、国際基準のディスカッションとはこういうものかと思った。

そして夜はホールでカラオケをし、UNO やチェスに Monopoly、Truth or Dare といったゲームで盛り上がった。議論では火花を散らしても、それとプライベートは別というわけである。21 時でも明るい屋外のテーブルで、ドイツ人 2 人とロシア人 3 人と UNO をするのはとても新鮮な体験だった。誰かの番がくるたび、ドイツ語とロシア語と日本語の表現が飛びかう異様な環境だった。高校の時にかじった片言のロシア語を話したらひどく驚かれ、どうやって勉強したのか、など根掘り葉掘り聞かれた。この会話をきっかけに始めは接点がなかったロシア人たちと言葉を交わすようになり、ぐっと距離が縮まったのを実感した。ロシア語を勉強したことがあってよかったと思った瞬間であり、言語学習の面白さを垣間見た。

金曜日のディスカッションのテーマは、職のない不法移民や教育を受けていないシングルマザーなどの困難な状況に置かれた人々をどう社会に統合していくことができるかについて話し合うというものだった。今回はグループの規模も小さく落ち着いた雰囲気だったので何回か発言の機会を得たが、やはり多国籍の場では自分が日本人として見られ、日本の事例や立場、視点が求められるのだと感じた。私は今まで、世界の人々とコミュニケーションをとるには世界各国の知識が必要だと疑わなかった。それは一日目、日曜日の夕方にも感じたことで、確かに正しかった。しかしそれだけではなかった。自分の国のことだってしっかり勉強しておかなければならないのだ。自分の国のことを聞かれて答えに詰まるほど気まずいことはない。自分はまだまだ未熟だなと思わされた一日だった。そして夜は、暗闇の中を「そんなに遠くない（not that far）」徒歩 45 分の湖まで 20 人くらいでハイキングに行った。ビールの瓶の栓を道端のごみ箱のへりで開けた時に言われた「君ももうドイツ化（germanized）されてしまったね」という言葉が印象に残っている。

気付いたら土曜日になっていた。知り合いになった人たちに別れの挨拶をするので結構忙しく、思ったより多くの友人を作れていたことに我ながら驚いた。改めて考えると何と濃密な 1 週間だったことか。結局、渡航前に散々悩んでいたことはみな杞憂に終わったというわけで、行けばなんとかなるというのはその通りであった。

誰かの引率なしに一人で海外を巡ったのは初めてだったので、とても多くの発見や気づきがあった。ただ、もしこれが私の初の海外だったら、あまりの環境の変化に耐えられたか疑問である。身の回りのことを全て外国語で、しかも一人でこなさなければならない環境というのは、やはり体力も使うしストレスもたまっていくものである。TLP の春季研修で一回ドイツ暮らしを体験し、ドイツの公共交通機関の乗り方やスーパーでの買い物のやり方などに慣れていたからよかったものの、そうでなければ精神的に辛かったかもしれない。語学や学問以外にも、コミュニケーション力や精神力など、もっと成長しなければならないと感じさせられた 1 週間だった。

このサマースクールに参加しようと決めた 5 月の自分に賛辞を贈りたいと思う。同時に、奨学金を下さった DESK の方々、DAAD、そして多くのサポートをしてくれた両親に最大級の感謝をしたい。どれか一つでも欠けていれば、私がこんな多くの学びを得ることはなかったかもしれない。ありがとうございました。

（2023 年 9 月 26 日受理、2023 年 9 月 28 日公開　※DESK-Miszellen 編集委員会記入）